

普遍言語の夢想

—試行の周辺から—¹⁾

高 橋 純

普遍言語の問題には二つの極が考えられる。哲学的普遍言語の問題と世界共通語の問題である。前者の言語はわれわれが同一の真理を共有し、後者は共通の生活世界を共有することを可能にしてくれるとされる。これら二つのことは時に同一視されることもあるが、基本的には別物である。この二つの極の間に人間は、一面では普遍の真理を分有する個別存在として、もう一面では一般性を分け持つ特殊存在として位置づけられる。普遍と個別の間の隔たりと、一般性と特殊性との隔たりは似て非なるものだ。それぞれの隔たりを超えようとする願いが、前者についてはライプニッツの結合術のような普遍記号法を構想させ、後者についてはエスペラントのような万国共通語を生む契機になるのだろう。こうした願望の実現には当然、新たな言語の考案や既存の言語の変革や改良が前提となる。そして事実、過去において無数にといつてよいほど多くの試みがなされてきた。しかし、数多の試みがなされてきたという一事がこの企ての困難さをすでに十分物語っているといえる。要するにどの試みも完璧であったためしはないのだ。とはいえそうした様々な試行から、われわれは自分自身と世界について何かを学ぶことはできる。

ヨーロッパの神話的伝統においては、神の言葉とアダムという言葉とバベル以後の言葉がある。これは、「事物を作り出す」言葉、「事物の本質」を反映する言葉、「事物の概念」を指示する言葉というように階層化することができるだろう。そして種々の普遍言語の企図はこれらの階層のどこかに位置づけられる。

普遍言語といえはまず思い出されるのはライプニッツの「結合術 *ars combinatoria*」だろう。それは、すべての言葉がアルファベットの結合からなっているように、もしも人類の思考のアルファベットを見出すことができれば、その組み合わせ変換から一切の認識が導出できるはずであるという構想である。そして、その可能的結合からは既知の知識は無論のこと、未知の知識も導き出せるはずであり、従ってそれは知られざる真理の発見法でもある。彼の結合術あるいは普遍記号法の構想については、易における太極図の六十四卦の配列がまさしく 0 から 63 に至る二進法数学であることを発見した事実からの影響が語られるが、結合術の構想はこの発見に先立って打ち出されていた。ただし、だからといってそれはこの 17 世紀の大天才一人のアイデアとして生まれたわけではない。ライプニッツに先駆けて 13 世紀に一人の人物が「アルス・マグナ」という名の下にすでに同じ構想を描いていたのであり、やがてライプニッツがそれを発展的に継承したのだと言える。

ライムンドゥス・ルルス (1232? マリョルカ島—1316)、カタロニア語名ラモン・リュウリュ。その博識と敬虔さから「天啓博士」と称される。フランチェスコ会士となった彼は、回教徒などの異教徒改宗のための宣教と異教徒駁論のための著作の執筆をみずからの天命としてこれに挺身して、北アフリカのブージーで回教徒に投石されて殉教死し、1419 年にローマ教会から列福された。哲学的にはトマス・アキナスの影響を受け、アラビアの合理主義哲学、特にアヴェロエス説に反対する立場をとった。死後彼はたちまちのうちに錬金術師として仰がれるようになり、生前

にはその知恵と術を駆使して英国王エドワード三世のためにライモンダインと称される6百万のノーブル金貨を生み出したという伝説が生まれた。その真偽はともかく、ルルスが錬金術師として伝説化するについては、彼が考案した「ルルスの術」あるいは「アルス・マグナ Ars magna Raimundi」の存在が欠かせないことは間違いないだろう。これはそもそも異教徒との論争における方法的武器として案出されたのだが、その効力には並外れた包括性と普遍性があったことは、後世多くのルルス主義者を生み、ジョルダナーノ・ブルーノやライプニッツといった汎知学的思想家に多大な影響を及ぼしたことから推測できる。

ルルスの『大いなる術』とはいかなるものか（『大いなる術決定版』と『小さき術』は1308年に著わされた）。

論理学でありかつ形而上学であるもの、第二の認識を云々する従来の論理学とはちがって第一の認識を論じる術を、すなわち思考のリズムと実在のリズムとの対応をあきらかにして連想によって実在界の諸関係がいったいなにを意味するのか、それを解明してくれるような術を、かつてルルスは夢みたのである。ルネサンス時代になると、白眼視されたジョルダナーノ・ブルーノの記憶術作品に、それはまったき表現をみた。……『アイデアの影について』でブルーノがやがて連想——イメージ、図像、文字のむすびつき——の領域に立ち入るとき、人智を無限に増大したり、新しい着想をえたりする希望を、論理メカニズムと心理メカニズムとの組み合わせにたくすのである。こうしてブルーノ文書のなかで、古代修辞学書とルネサンスの人工記憶論とに由来する場所およびイメージの使用術が、ルルス思想の祈願とともに一体となってあらわれたのである。²⁾

アルス・マグナは記憶術であり結合術であり論理学であり普遍学である。アヴェロエス派に対してキリスト信仰を擁護し無信仰者や異教徒を改宗させようという特定の意図が、全人類を真理と神の奥義の理解へとつれもどす方法として実現したものだ。

記憶術の歴史は古代に遡り、ギリシャのシモーニデース（宴会の最中に起きた地震で圧死した数十人の客の名を、たまたま難を逃れた彼がすべて語んじた）やローマのキケロ（数時間におよぶ大演説を原稿もなしに完璧にやってのけた）のエピソードは有名な記憶術の例だろう。それがルルスのアルス・マグナにおいて一大変貌を遂げたのだった。

1272年頃、苦行中に受けた啓示で彼は神の全属性（善、無限、永遠等）を幻視し、それは創造の全階程にあまねく浸透しており、この属性に基づくひとつの「術」を構築できるはずだと信じるに至った。この術は、実在に立脚するものであるゆえに普遍的に有効であるはずなのだ。この術は、魂の三つの属性（知性、意志、記憶力）についていえば、知性にとっては真理を発見・認識させる術であり、意志にとっては真理への愛を育む術であり、記憶力にとっては真理を思い出させる術として、ひとつの記憶術と見做される。これは修辞学的伝統に根をもつ古典的記憶術とは異質なものだ。古典的記憶術はいわゆる場所的記憶術であり、あらかじめ知悉した場所を脳中に設定し、記憶すべきものをそこに配置しておく、それらの場所との関連で、いざという時に容易に想起ができるというのがその原理である。これは知的な指向性に物体をシンボルとして纏わせるだけで、記憶を哲学的「実在」に依拠させるものではなかった。対するにルルスのアルス・マグナはプラトニズム、とりわけネオプラトニズムの血を引いている。これは、彼が神の「品格」と呼ぶ第一原因を認識しようとするものなのだ。ルルスの術はすべて、第一原因と見做される神

の属性すなわち「品格」に基礎を置いている。

ルルスみずからが説いた術には、古典的記憶術で記憶力の刺激に活用された視覚的・物的シンボルに相当するものは見当たらない。彼の術で利用される概念は文字で示され、そのために術は抽象的な代数的性質を帯びる。さらに著しい特徴は、記憶に運動が導入されたことである。ルルスの術において文字で概念を表す図表は静的なものでなく、軸を中心に回転する。そのひとつは多重の同心円からなり、その上に並ぶアルファベット文字が各概念に対応する。この同心円が回転して概念の組み合わせが得られるようになる。《A》の図において九分割された円周上の概念が神の「品格」であり結合術の原理である（善、偉大、永遠〔持続〕、力、叡知、意志、美德、真実、栄光）。内円の交錯する線は可能な結合を示している（図1）。隣接関係を求めるならば、神の「善」は偉大であり、その「偉大さ」は永遠であり、その「永遠性」は力にほかならない……。これから派生して、内円に四角形あるいは三角形が内接して回転し、概念の組み合わせを押し進める図も考案される（図2, 3）。こうして神の属性の顕現としての万象についての知が一元的に導き出されるのだ。

「神」に始まって天使、天界、人間、動物、植物等々の創造の全段階に「術」は適用される。これは中世に考えられた存在の階梯である。各段階において、「術」から本質としての「善」、本質としての「偉大」等々が導出される。表示に用いられた文字の意味は「術」がどの段階に適用されるかに応じて変化する。例えば「善」を表すBの文字は、創造の階梯を下るにつれて、あるいは「術」が扱う九つの《主辞》にわたってその意味を変えてゆく。

〔段階〕

神	B = 神の品格としての善
天使	B = 天使の善性
天界	B = 白羊宮など黄道十二宮や土星などの惑星の善性

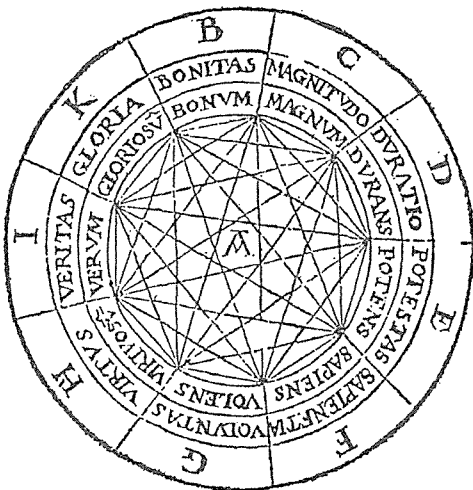


図 1

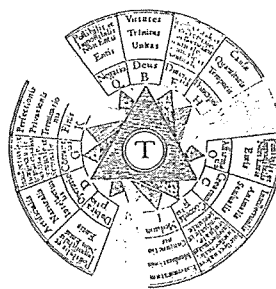


図 2

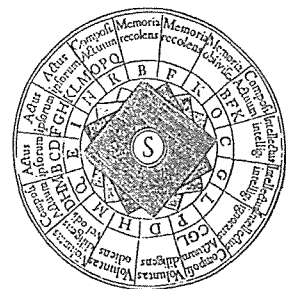


図 3

（図1）はアルス・マグナの《A》の図。中心のAは神を、周囲に配された九つの文字が神の属性たる九つの「品格」を表し、それらの二重三重の複雑な組み合わせ結合が内円の三角分割の線によって示される。（図2）の三角は三位一体を、（図3）の四角は四大元素を表す。J. -C. Frère, *Raymond Lulle*, éd. Grasset, 1972 より。

人間	B = 人間における善性
想像的主辞	B = 想像力に秘められた善性
感覚的主辞	B = 獅子の善性のごとく、動物創造に与かる善性
自育的主辞	B = 胡椒の善性のごとく、植物創造に与かる善性
元素的主辞	B = 火の善性のごとく、四大元素に潜む善性
器具的主辞	B = 技芸・学問の効力に潜む善性 ³⁾

ルルスは、わずかに円と三角形と四角形の組み合わせから導かれた結合術を通じて、神の創造あるいは存在の全段階の認識をもたらす普遍学の鍵であり、人間の知性を神にまで届かせる(真理を想起させる)記憶術なのだった。それは、通俗的な実用目的を念頭に編み出された手段ではなく、実在と生の究極の神秘にまで透徹する神の暗号解読の手段だったのだ(図4)。

ルルスの術の理解にとって肝要なのは、「それが上昇と下降の術」とであるという点である。原理概念の刻まれた幾何学的図版を掲げた「術者」は、各段階で同じ結合比を測りつつ、存在の階梯を上り下りする。自然界の元素的構造の配置は、神の名〔品格=属性〕に基づく創造の崇



図4 ルルスの著『知性の上昇と下降の書』を図解した16世紀の木版画。「術」の回転図版を手にした「知性」が創造の階段の一段目(石と刻まれている)に足を掛けている。階段は石に始まり、火、植物、動物、人間、天界、天使と創造の段階を表し、最上段には神と書かれている。この最上段に達すると「知性」はついに「叡知の館」に参入することができる。F. A. Yates, *L'art de la mémoire*, より。

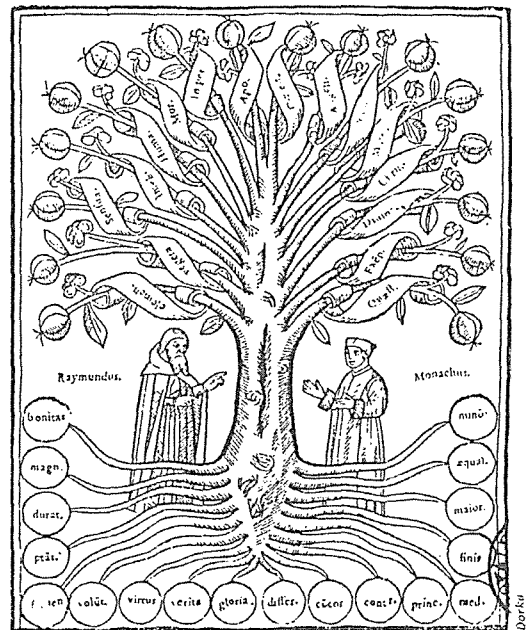


図5 《学問の樹》は「術」の九つの絶対的原理と九つの相対的原理を根に持ち、幹は十六本に枝分かれして、各枝が学問の森を形成する樹となる。J. -C. Frère, *Raymond Lulle*, éd. Grasset, 1972 より。

高な構造と合し、総体としての「普遍術」を成す。これはあらゆる問題に適用可能なのだ。なぜなら、この術を通じて精神は、宇宙を雛形として作られた論理を手立てにはたらくからである。⁴⁾

こうして知性が到達する上限と下限のあいだには、一元的で階層をなす宇宙の全特性が集約されて、人間はひとつの小宇宙、神の生ける似姿として現れる。この人間の普遍的実在についての認識をルルスは百科全書的に統轄して「学問の樹」として示す(図5)。この構想の根底にあるのは、宇宙本来の一元性と人間知性の本質的一元性とが相似の関係にあるという認識である。学問の樹の十八本の根は、術の九つの超越的原理(神の品格)と九つの相対的原理(相違と一致と対立、端緒と中間と終局、多数と同等と少数)とからなり、そこから伸びた幹から個々の学問が十六本に枝分かれして学問の森を形成するのだ。

したがって知的世界の一元性は、術の絶対的原理と相対的原理とが実在界と教養世界との共通根をなすとの事実立脚しているであろう。事実、枝が自然学の初歩的な四原理を示し、葉が物体の偶有性を象徴し、果実が黄金や石といった個々の物質をさすような元素の樹だけでなく、人間の能力や生得的習慣とともに後天的習慣とか機械学や自由学芸をふくむ人間の樹は、(ルルスのアルファベットの九文字に象徴される)この根によってささえられているのである。……汎知論的理想にあつては、知的世界全体への必然的精通が強調されるとともに、すべてを支配でき、創造主が事物に刻印したアルファベットを直接読み取ることを可能にしてくれるような法則、秘訣、言語の知識が力説される。実在世界と知的世界とは、その構造の本質的一元性、同一性において、またその内的〈調和〉において把握すべき実在とされる。⁵⁾

存在の真理に至るための無謬の術であるアルス・マグナは神の全知に至る鍵だった。ところで、神の全知は神による創造において証される。つまり神の全知とはすなわち全能であることにほかならない。だとすれば、人間における全知もまた、神の全能を雛形とするような行為・実践つまり創造を通じて証されることになるのではないか。ここからはわずか一步で魔術や錬金術が始まるのだ。この一步の隔たりが、神的なものと人間的なものとを隔てる深淵であるとしても、錬金術師の夢想の中で一挙に飛び越えられれば、ルルスの術がそのまま金属変成作業の指針と解されるようになるのも頷けるのだ。ルルスの術が啓示する普遍言語の究極の姿は「事物を作り出す」神の言葉に等しいものだったのだから。

アルス・マグナの術の円盤を回すことによって、人間は自分の不完全な知性に依存することなく神の叡知を直接獲得できるという。だがそれは人間(の思考)を必要としない言語であり、人間の不完全性を抹消しえて初めて可能となるようなユートピア的言語にほかならない。これには当然批判も出てくる。この言語の力を借りるならいかに知性凡庸な人間でも哲学者以上に真理をわがものにできるという。しかし、それが本当なら全世界が地上楽園となるはずだが、現実を見ればわかる通り、そんなことは人をたぶらかすお伽噺でしかない。本当に真理を手に入れることができるとしても、それを真理として受け入れうるためには、その認識を支える真の哲学が前提とされるはずなのに、人間はそれを手にしてはいないというのだ。

しかし他方では、普遍言語に対するこうした懐疑主義的態度に抗してその可能性が追究され続け、ライプニッツの手によって新たな展開を見たのだった。

いかにこの言語が真の哲学に依存するものであろうと、その完成度に左右されるわけではない。要するにこの言語は哲学が完全なものでなくても、形成可能だということである。人知が増大すればそれだけこの言語も豊かなものとなるであろう。そのことを期待すれば、われわれの知るところは利用し、われわれに欠けているところを知るとともにそれを理解するすべををみいだすうえでも、この言語はとり挙げるに足る助けとなるであろう。また理性をよりどころとする論証の矛盾を一掃し駆逐するうえで、とりわけ役立つであろう。そうなれば、計算も推論も結果としておなじことになるからである。⁶⁾

ライプニッツはルースの術の原理を否定することはなく、その格と根の任意性や組み合わせの不適切さを改めた。彼はルースが定めたカテゴリーの数が九個に固定されているのは不自然であり、また徳ならびに悪徳は一次的ないし普遍的な概念ではないと指摘しつつも、ルースの術を刷新して、精神活動を演算に類比して展開できるような論理学の確立を目指したのだった。そして彼は、神の「品格」から出発するのではなく、単一概念の一覧表を始めに据える。それを手掛かりにして、所定の主辞に対する可能なすべての賓辞を見つけだし、また一つの賓辞が与えられると、その可能なすべての主辞を見つけだすことができるはずである。第一格の概念用語として、1—点、2—空間、3—介在者、……9—部分、10—全体、11—同一性、12—異質性、13—単一性、14—数、15—多数等々を設けると、これら第一格の概念を二つずつ組み合わせると第二格の概念用語が得られ、三つずつ組み合わせれば第三格の概念用語となる。例えば、「量」は(14・9)で表され、「区間」は(2・3・10)となる。こうして、単一概念から出発して、それらの組み合わせにより、それらを基本因子とする複合概念が順次階層的に導き出される。「区間」の賓辞を列挙すると、第一格の因子としては空間(2)、介在物(3)、全体(10)、第二格の因子としては中間の空間(2・3)、全空間(2・10)、空間内での介在(3・10)、そして空間自体の定義である(2・3・10)となる。

無論これ自体はそのまま日常通用する共通語ではないが、どの言語であれそのひとつに習熟した読者であれば、誰にでも理解可能な表記としての、事物の本質をあらわす実在記号法と考えられた。とはいえ、どのような言語を使う人間にとっても理解可能な記号法が存在するならば、その理論に基づいた「話す」ことのできる普遍言語が想像されずにはいないだろう。ライプニッツ自身もその例に洩れず、みずからの考案になる論理演算体系を話せるものに変えようと構想したのだった。彼は1から9までの数字を最初の9個の子音字(b・c・d・f・g・h・l・m・n)で、十進法の各位(一・十・百・千・万)を5個の母音字で表し、それ以上の位には二重母音の使用を考えた。こうして81,374という数はMubodilefaと綴られ、そのように発音されることになる。この場合、各音節の母音は十進法の位を表しているために、音節そのものの機能は単語の中で占める位置に左右されない。従って、 $1,000 + 300 + 4 + 70 + 80,000 = 81,374$ という場合には、同じ数をBodifalemuという語によって表すことも可能である。ライプニッツはこの性質を、人工言語による詩作を可能ならしめるものであると自賛した。

しかし事はそれほど単純ではない。こうした言語表記法の体系は二重に独断的なものだからだ。それは既存の言語の文法やシンタックスをまったく無視しているばかりでなく、推論抜きで機械的に算出された単語が知性に対していかなる概念を提示しているかを判定する基準が欠けているのだ。そこで彼は、当時の国際語であるラテン語を基礎とする記号法の探究へと方針を転換した。究極の目標は概念の分析であり、その補助として言語を分析すれば、それによって概念分析に代

えることもできる。まず、通常の言語を定義によって、単純で還元不可能な項にまで分解し、次ぎに文法およびシンタックスを基本的要素に還元することが必要となる。

いまやライブニッツにとって、人間思想のアルファベットを発見し普遍的記号法を確立するために必要なことは明らかだった。すなわち、まず最初に、すべての概念を分析し、定義によってそれらを単純要素に還元すること、その次には、適当な記号を用いて単純概念を表わすとともに、それら単純概念の組み合わせと相互の関係とを表わす記号を考案すること、そして最後に、概念分析は同時に真理分析でもあるが故に、単純かつ自明な原理に還元することによって、既知のすべての真理を論証することである。言い換えるなら、普遍的記号法を確立するためには、その前にまず、既知のすべての知識の分類と分析と論証を行なった『百科全書』が完成していなければならないのである。⁷⁾

こうして見ると、その自負にもかかわらず、ライブニッツの普遍言語構想もルースのアルス・マグナと同じアポリアに逢着するように見える。ルースの術が実際論理学の回転式抽選機であって、そこから出てくるものが当たり籤か空籤かという判定については、悟性はどこか別のところからその答えを得なければならない（そのために百科全書的な『学問の樹』が要請される）のと同様に、ライブニッツの普遍的記号法も、それが真に普遍的でありうるためには、既知の全知識を収めた百科全書をあらかじめ必要とするのだ。ここで、普遍言語(しかもその言語による詩作?)というアイデア自体が孕む矛盾を指摘してその構想を否定するのが本稿の意図ではない。むしろ、達成不可能な夢として受け継がれ続けた普遍言語への執拗なまでの憧憬に注目したい。

人工言語のなかでも、既成の自然言語の改良から生まれたエスペラントのような「後驗語 *langue a posteriori*」と違って、既成言語から出発しない「先驗語 *langue a priori*」はいずれも共通した意図から生み出される。それは、人間の知識にとっての対象の統一性と方法の統一性を確立するということである。つまりそれは、諸学問に共通する普遍的方法を目指すものであり、その方法を通じて理性は、その純粋に論理的な機能を果たしつつ、最高度の体系的統一を理解することがもたらす多様な知識の獲得に寄与できるのだという、(ヨーロッパの)学問的伝統に確実に根を下ろした企てだったのだ。それが個人のアイデアに発する試行錯誤として現れる時、一見突飛な形而上学的幻想の趣を呈するかもしれない。だが実際にはそれは笑うべきものである以上に重要な歴史的帰結を生み出してきたのだ。

対象となる問題のすべてに適用できる唯一の方法というものはなく、それぞれの対象にはそれぞれに相応しい方法があるとは、アリストテレス以来13世紀のトマス・アキナスまで繰り返された見解だが、後者の同時代人の一人ロジャー・ベイコンは「実験学 *scientia experimentalis*」において、もう一人ライムンドゥス・ルースは「大いなる術 *ars magna*」において、あらゆる学問に適用できる普遍的方法という概念を打ち出したのだった。前者は経験的、後者は先驗的な方法である。いずれも諸学の原理となる知識の普遍性を生み出そうとするものであるが、とりわけライブニッツの結合術において復活することになるルースの術はまさに「先驗語 *langue a priori*」としての普遍言語創造の願いと切り離せない。ルースの祈願を受け継いだライブニッツの試行錯誤は一世紀後、記号の組み合わせで複合概念を表現できるという見解を放棄したカントから時代遅れのとりとめない錬金術的梦想と揶揄されながらも、やがて記号論理学の先駆者としてその試みが顧みられ、オーガスタス・ド・モーガンやジョージ・ブールに連なる系譜の中に蘇ることに

なる。論理学者としての彼の天才的な先見性が真に評価されるためには20世紀まで待たねばならなかった。

算術と代数学をモデルに、組み合わせに応じて新たな真理が自動的に表現されうる記号論理的な人工言語の創出を模索する過程で、ライプニッツは0と1だけで全数字を表現できる二進法の卓越性を信じ、それは今日コンピュータ言語として実用化を見ている。この事実から、彼の先駆性を語り、その普遍言語の夢は現実となったと結論してよいのだろうか。確かに一面の真理としてならばそれは許されるだろう。しかしそれで普遍言語構想に込められた彼の夢が汲み尽くされたわけではないのも本当なのだ。彼はその『結合術論』(1666)出版の十余年後にもこう語っている。

わたしの考案には理性の運用法がそっくり含まれている。すなわち論争の裁定者、概念の通訳、可能性の秤、経験の大洋を導いてくれる羅針盤、事物の財産目録、想念図表、近い将来にさぐりをいれる顕微鏡、遠くのことを言いあてる望遠鏡、一般演算、無邪気な魔術、非空想的カバラ、母国語で読める表記法、はたまた数週間たらずで習得でき、世界中をすばやくかけめぐって真の宗教を到達可能なところならどこへでも運んでくれるような言語、そういった類のものである……⁸⁾

これはまさにルルス(ルース)の夢と瓜ふたつではないか。これは取るに足りない個人の誇大妄想的な夢想なのではない。逆にこうした夢想がはじめにあつてこそ、人間の知の歴史の中に様々の試行が現実(リアリティ)に実を結んでいくのだろう。そしてそのように考えればこそ理解できる誤謬というものがある。

1701年にライプニッツは、康熙帝の側近にあったイエズス会宣教師ブーヴェからの書簡で偶然に二枚の大極図を入手した。そして、その大極図の64卦の配列がまさしく0から63までの二進法数学であることを発見した(図6)。二人ともこれを中国文化の伝説上の創始者伏羲の創案になる六爻の配列であると見做し、自分たちは後代の中国人が失ってしまった古代の高度な科学知識を再発見したと確信したのだった。破線(陰爻)と実線(陽爻)をそれぞれ0と1とすれば、円形の配列においては、下から上へと反時計回りに0から31まで至ったところで下に転じ、今度は時計回りに32から63までの数が上へと記されていることになる。ところが実際にはこの図は伏羲の手になるものではなく、11世紀の邵雍(邵康節)が製作したもので、その手続きには数理的な解釈が与えられていたわけではなかった(この配列のもとになったのは、白と黒に二分された矩形を順次重ね合わせてつくられた分割表だった)。さらに『易経』では六爻は文王(紀元前1050年頃)が定めたとされ、これとは別の順序で配列されており、そこには数体系との類似性は見られない。要するに、ブーヴェもライプニッツも実は中国学の知識の不足ゆえに誤った解釈をしていたのだ(彼らは、伏羲が易の基本要素の三爻の発明にあたっては創世記を念頭に置き、またその三爻の特性は三位一体と関連していると信じていた)。

ただし、この誤りを理由にしてライプニッツの構想を否定する必要は少しもない。こうした誤解そのものが彼の願いの切実さを証しているのだから。その願いとは、実在の存在論的構造を明らかにする普遍学が構築されねばならず、現実(リアリティ)に他者と共有しうる普遍言語が創造されねばならないという願いである。そして、もしも実在の秩序の中にそうした願望を叶える鍵が秘められているとするならば、歴史的事実関係の理解の間違いを超えてその背後の自然の運動の中に確かに

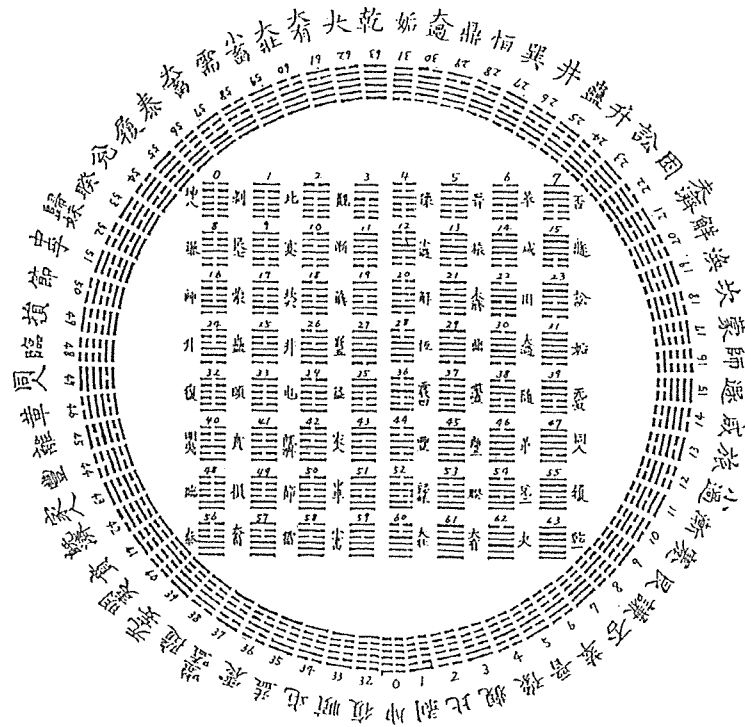


図6 ライプニッツが見た六十四卦方位図(数字の書き込みはライプニッツ)。蔡恒息『易のニューサイエンス』中村・武田訳，東方書店より。

彼はその鍵を垣間見たのだとする結論を誰も否定しきれないだろう。この否定と肯定のあわいの領域がわれわれの知の現状にほかならず，そこには今も普遍言語の夢が誰のものとも知れず息づいているはずなのだ。

注

- 1) 本論のルースに関する記述は，錬金術にことよせて書いた拙論「アルス・マグナと賢者の石」(『ユリイカ』1993年1月号，青土社)と一部重複することをお断りします。
- 2) パオロ・ロッシ『普遍の鍵』清瀬卓訳，国書刊行会，1984，pp.27—28。
- 3) Frances A. Yates, *L'art de la mémoire*, trad. de l'anglais par Daniel Arasse, éd. Gallimard, 1966, pp.194—195.
- 4) *Ibid.*, p.196.
- 5) ロッシ，前掲書，p.84.
- 6) L. Couturat: *Opusculs et fragments inédits de Leibniz*. ロッシ，前掲書，p.308.
- 7) E・J・エイトン『ライプニッツ普遍計画』渡辺正雄他訳，工作舎，1990，p.141.
- 8) G. W. Leibniz: *Sämtliche Schriften und Briefe herausgegeben von der Preussischen Akademie der Wissenschaften*. ロッシ，前掲書，pp.330—331.